

ば。本易破將ることあつた。左近に當日も晡天に到り。限てあつたに假る
退螺吹て諸勢を續ら。船擣連てを退きし。城中ひそ虎口を遁生。終日戰
若を療めそのち。清水兄弟、難波と松井。高橋となつて亦暮び。毛利三家へ
救を乞ひんと水練の武士を擇み出。兵列へ危急を告たゞぐ。荒筋ちへ
備兵士の残勢を切よ素にて翌日間者をほり。毛利の曉候を听つむ
るに。と自二家大軍を率し。援兵にて來ゆく。告る俄して備將に云らく
中國名家の毛利兩川援兵定めて大軍かづん。それこそも赤ゆふす肺
生。まが兵列加勢の壓兵とて。舍身秀長を大ねく。備兵勢に股肱のみ
安藤に到り。城中強危急のじき。毛利三家へ聞達られべ。吉川元景。小
早川隆景の大將。雲州の諸軍を召集。その勢都合四万餘騎にて。
城中の圓岩城の廻山に生浪毛。大守右馬頭輝元。安藤。月防。長門の
軍勢。四万餘騎にて進發か。廻山より三里隔て。横尾山に生障ある
餘毛。も秀吉頼てこれららの分撥せし。只撤攻せらる。と。云堤をよりて崩
くに。も。荒揚うち。水愈増て。城中方丈の水の漲ること七八條。今日の
晩日に水漲増り。翌日は今より深くされば。遠城遂ふハ水底小流。老少男
女盡く。魚鼈の餌ふきりあんと。悲嘆のまこと多く。大將清水長萬
暮び水練の者。小令し。吉川元景の陣ふ遣ち。城中の相與せを名に。そ
久暮。隆景。高橋して。かよとぞ。堤を改築し。城兵伐木ひ立たんとい様く
子支を固ら。隆景諸将小向ふ。自方よりとこ小勢をもつて。日向の
城へ駿て出かべ。故に自方の小勢を悔て。生軍せんことを必定なり。其胸乃郎自
繫と率て。羽柴本旗本の殿。そ蒐らん。え長嫡子元信三男也。友人ハ雲仙二郎